

言語から見た、中央の周縁化と周縁の中央化

林 正 寛

はじめに

現代言語学は、言語や方言といった言語形態相互の間に優劣の差はないと主張する。理論的にはたしかにそうなのだが、現実の言語形態のありようは、現状においても歴史的に見ても、政治や経済、文化のありようを反映した言語形態間の社会的評価の差の影響を受けている。

標準的な言語形態とそうではない形態、すなわち方言との差や、高等教育を受けエリート階層を構成する人々の言語形態とそれ以外の人々の形態との差などが、多くの社会で意味のある差として認められている。

では、言語と地域や階層などを相関させることによって何が分かるのか。本稿は、言語に対する社会的評価の

差異と、地域やそこに暮らす人々に対する社会的評価の差異を、中央対周縁という構図の下にたがいに関連づけることによって、何が見えてくるかを検討しようとしたものである。

言語を地域に関連づけて研究する分野に「言語地理学」がある。そもそも「言語地理学」というのも、おもしろい命名の学問である。おそらく、地理学の関係者より、言語や方言の研究にたずさわる者の方が、この学問についてはよく知っているのではないだろうか。したがって、タイトルに「言語地理学」と冠した書籍を、そのタイトルに引きずられて地理学の棚にでも置こうものなら、宝の持ち腐れになってしまいかねない。そんな事情もあって、研究者のなかには、「地理(学)的言語学」

とか、もっとつづめて「地理言語学」という、正直といえは正直だが、どこか怪しげな命名を試みた人もいる。だが、いっこうに定着した様子がなくところをみると、追隨者は出なかったのだろう。

こうして「言語地理学」は、地理学のほうの関心をさして引くこともなく、否、そちらの関心を引かないのをさいわい、いったい地理学に属するのか言語学に属するののか、その帰属先を深く問題視されることもなく今日に至っている。と言うと、言語地理学自体、怪しげな学問ということになりそうだが、その真偽はともかく、言語地理学が、すなわち、言語地図の作成とそれに基づく言語状況や言語変化の分析が、言語研究一般に對し、とりわけ言語の歴史や言語の発展過程の研究に對し多大の貢獻をしてきたこと、これは否定しようのない事実である。その言語地理学の入門書を高名なロマニスト、エウジェニオ・コセリウが著している。まずは彼が引いている言語地図を取っかかりにして、話を始めることにしたい。

ゲルマン語の音韻推移とライン川

そのコセリウの『言語地理学入門』（柴田武・W・グ

ロータース共訳、三修社、一九八一年）には、一〇葉以上の言語地図が収められているが、いまここで取り上げようとしているのは、そのうちの二葉である。一つは、本書一五頁の第3図「ライン地方における『第二次音韻推移』の等音線」であり（コセリウはこの図をE.H.Sturtevantの著作から引用している）、もう一つは、本書五三頁の第8図「ライン河に沿ってUSの地域に侵入したUNSの地図」である（これはA. Bachの著作からの引用）。

では、ライン川の流域一帯の地図を念頭に置くなり、実際に開くなりするでしょう。この一帯は、ローマの時代からゲルマンとラテンがつばぜり合いを展開してきたところであるが、言語に関して言えば、ゲルマン系の言語がラテン系の言語をライン川の西側に押しやるかっこうになっている。現在、その最初の一滴から北海に注ぎ込むまでの間、ライン川を越えてラテン系の言語がその東側で話されている地域はない。こうしてこのあたり一帯からは、ベルギーにおけるゲルマン語（オランダ語）対ラテン語（フランス語）の根深い言語戦争や、アルザスの言語問題、スイスの多言語主義など、言語社会学的

に見て興味の尽きない材料がもたらされることになる。

さて第3図には、ストラスブルからオランダに入るあたりまでのライン川流域での、対を成す五つの語彙項目をめぐる等音線が描かれている。その五つの項目とは、「リン」を意味する APPEL と APPEL' 「それ(は)」を意味する DAS と DAT' 「村」を意味する DORF と DORP' 「作る」を意味する MACHEN と MAKEN' 「私(は)」を意味する ICH と IK である。周知のように、どの対においても、先に挙げた語が今日のドイツ語の標準的な形態である。したがって、各対の二番目の語は方言形ということになる。そしてどの等音線についても、標準的な形態はその南側で、方言形はその北側で用いられている。

ゲルマン語は、インド・ヨーロッパ語の一翼を担う重要な語派だが、他の語派と区別される際だった特徴として、その子音体系が音韻推移を経験したことを挙げることができる。しかし、その音韻推移は一度ではすまなかった。最初の音韻推移によって他の語派と子音の様相が体系的に異なった後、今度はゲルマン語派の一部に第二次音韻推移が起こった。その結果、その「一部」に該当

する古代高地ドイツ語の子音の様相が、他のゲルマン諸語と異なることになった。これら五つの対をよく見比べると、FとP、SとT、CHとKという音変化が生じたことが了解されるが、これが第二次音韻推移によって引き起こされた結果である。そして、現代の標準的ドイツ語は高地方言に依拠しており、この方言は古代高地ドイツ語の流れをくんでいる。結果として、現代の標準的ドイツ語は、古代高地ドイツ語に起こったこの特異な現象を引き継ぐことになり、他のゲルマン語、たとえば、隣接するオランダ語と子音体系の様相を異にすることになった。(なお、等音線とは、対を成す両語形の境界線のことである。)

等音線、すなわち境界線は、単語ごとにまちまちである。この五対のうち、ライン川を上流から下るにつれて最初にあらわれる境界線は、APPEL と APPEL' のそれであり、ストラスブルとマインツの間をほぼ東西に走っている。次に、マインツとコブレンツの間を南西から北東へと走る境界線が、DAS と DAT' のそれである。そして、コブレンツとケルンの間を DORF と DORP' の、ケルンとジュッセルドルフの間を MACHEN と

MAKEN の、さらにジュッセルドルフとエッセンの間を ICH と IK の、それぞれ境界線が東西に走っている。このように、五本の境界線はまったく別々の地域を走っている。同じ音韻推移の結果生じた対の組み合わせでさえそうである。すなわち、APFEL 対 APPEL と DORF 対 DORP、MACHEN 対 MAKEN と ICH 対 IK、どちらもそれぞれ同じ音韻推移を経験した組み合わせだが、上述のように、その等音線はライン川と同じ地点を横切っていない。

にもかかわらず、最初の対をのぞき、後の四対の等音線は、ライン川東方のロタール高原にいたって東状にまとまり、ほぼ一つになっている。これは、この高原が人々の往來の妨げとなり、音変化の伝播もそれ以上先には及ばなかったということを示している。それに引き換えライン川は、古来より交通の要衝であり、したがって人々の往來もはげしく、ある地点を境に言語の様相が一変するということはなく、変化するにしても、しだいしだいに変化することになる。同様の現象は我々の身近なところでも観察される。たとえば、日本の東西方言の境界線がそうである。ライン川が言語変化に及ぼす影響の

強さを物語るもう一つの地図を取り上げる前に、話を日本の東西方言の境界に転ずることにする。

日本語の東西方言の境界

かつて、東西のアクセント、すなわち東京式のアクセントと関西式のそれとの境界はどこにあるか、研究者の間で大きなテーマとなったことがある。結局、三重県出身の言語学者であり音声学者である服部四郎の調査研究によって、岐阜県西部の揖斐川あたりに境界線を引くことができるとされた。すなわち一本の線で問題に決着をつけようとした。たしかに上述のライン川流域の例でも、川の東方の高原地帯で多くの語の等音線がほぼ一本の線にまとまっていた。急峻な山岳地帯や流れが速く容易には渡れない川などがあると、それが人の往來の妨げとなるため、結果的にそこで複数の語の境界線が一つにまとまることはよくあることだ。しかし、岐阜県西部の地勢はそれに当たるだろうか。どうもそうは思えない。ライン川の例がそうであるように、本来、語の一つひとつには、それぞれ固有の歴史があり、だからこそ境界線もまちまちになりうるのである。岐阜県西部の場合も、多く

の語のアクセントの境界がその地に集まる傾向はあるにしても、東西のアクセントの境界は他ではなくここである、という把握の仕方には問題がある。⁽²⁾

語には一つひとつ独自の歴史があり、それが境界線にも反映すると述べたが、具体的な例でそれを見てみよう。馬瀬良雄が牛山初男の興味深い調査を引用している『東西両方言の対立』、『岩波講座日本語11方言』岩波書店、一九七七年、所収)。牛山は、五項目にわたって語法の違いを調べた。すなわち、

1 打ち消し表現に関して、たとえば、「行かない」と言うか「行かん(ぬ)」と言うか。

2 指定表現に関して、たとえば、「私のはこれだ」と言うか「私のはこれぢゃ(これや)」と言うか。

3 形容詞連用形に関して、たとえば、「白くなった」と言うか「白うなった(白なった)」と言うか。

4 一段型動詞命令形に関して、「起きろ」と言うか「起きよ(起きい)」と言うか。

5 W行五段動詞音便形に関して、「買った」と言うか「買った」と言うか。

さてその結果であるが、ライン川沿いの語形変化の例

を思い起こさせるような結果となった。

1の東方「行かない」と西方「行かん(ぬ)」の境界は、太平洋側から見えていくと、静岡市のわずかに西方から上陸北上し、山梨との県境にぶつかって向きを東に変え、そのまま県境に沿って富士の北側に回り込み、山梨県を東西に二分しながら北上し、長野との県境にぶつかると向きを西に変え、諏訪湖の南を東西に横切って長野県を南北に二分し、北アルプスにぶつかるとそれに沿って長野、富山、新潟の境まで北上し、以後、長野と新潟の県境に沿って東上し、そのまま群馬と新潟の県境沿いに北上し、ようやく日本海方面に向きを変え、新潟県を南北に二分して海に出る。なかなかの迷走ぶりである。

2の東方「だ」と西方「ぢゃ(や)」の境界は、一転じつにシンプルである。伊勢湾から愛知県の西端部をかすめるように北上し、岐阜と愛知の県境に沿って東上し、ついで岐阜と長野の県境に沿って北アルプスを北上し、そのまま親不知など交通の難所として知られる新潟と富山の県境あたりで日本海に抜ける。

3の東方「白く」と西方「白う(白)」の境界は、三河湾から三河中部を抜けて愛知、岐阜、長野の県境部に

いたり、そこからは2と同様の軌跡を描くものの、最後、長野、新潟、富山の県境部に達したとき、そのまま日本海を目指さず、新潟県内を迷走してから海に出る。

4の東方「起きろ」と西方「起きよ(い)」の境界は、駿河湾の奥で上陸し、山梨南部をかすめながら西に向かい、長野の南部を東西に横切り御岳あたりに達すると、向きを北に変え、後は2と同じコースをたどる。

5の東方「買った」と西方「買った」の境界は、愛知と三重、岐阜と三重、岐阜と滋賀、岐阜と福井、岐阜と石川のそれぞれ県境をたどり、ついで岐阜と富山の県境沿いに東上して北アルプスに達し、後は2や4と同じコースをたどる。

地図を開きながら、以上のいささか入り組んだ記述をたどっていくと、太平洋側ではこれら五本の境界線がほとんど重なっていないことに気づく。それに対し、途中の北アルプスと難所で知られる親不知のある新潟と富山の県境辺では、大半の境界線が束状にまとまっているのが見て取れる。さしずめ、太平洋側がライン川流域地方で、北アルプス以北がロタール高原というところであろうか。

この日本の言語境界線の分布からも、ライン川地方の等音線の分布についてと同様、我々は、ことばを介して共同体を作り、その共同体に固有のことばを蓄え(記憶し)、次の代へと伝える人々の存在に思いを馳せ、たがいに異なる共同体に属する人たちの接触の程度がどのようであるか(あったか)を考慮に入れる必要があることを知るのである。

地域と言語における中央と周縁

ライン川が言語変化に及ぼす影響の強さをうかがわせるもう一つの言語地図(「ライン河に沿ってDUSの地域に侵入したDUSの地図」)に戻ることにしよう。今日の標準的なドイツ語形であるDUS(私たちに(を))とそれに対する方言形であるUSとの境界線は、かつては先ほどのDASとDATのそれとはば同じあたりを走っていたと思われる。ところがその後、そもそもDUS形が優勢であったはずのライン川沿いの都市、すなわちカウブやコブレンツ、さらに下ってアンデルナッハにいたるまでのライン川に沿う盲腸のように細長い地域だけ、DUS形を用いる地域に変じてしまった。この事実から

分かるように、ドイツ語では南部寄りの、すなわち高地寄りの言語形態の方に広まる力がある。すなわち、この言語形態は、ドイツ語圏において超地域的・超民族的な機能を果たしている(カルヴェ著『超民族語』(林正寛訳、白水社、一九九六年)を参照のこと)。そのような背景があったればこそ、今日、高地方言の形態が標準的な形態として受け入れられてもいるのである。カウプやコブレンツ、アンデルナッハの言語共同体に属する人々は、往來の激しいライン川沿いでの暮らしのなかで、上流から来るドイツ人とも、下流から来るドイツ人とも交流を重ねてきたはずだが、自らの伝來の発音形態を放棄し、上流から入ってきた発音形態を受け入れたということとは、上流の言語にプレステイージュを認めたということである。それは、上流の言語を話す人々にプレステイージュを認め、彼らをモデル視したということでもある。こうしてドイツの二葉の言語地図を見終えたいま、ライン川を下っていく限り、どこでドイツ語が終わり、どこからオランダ語が始まったか気づきようがない、ということを知る。事実、先ほどの五例の対語の場合、今日のドイツ語の標準形となっていない方の語形(APPEL、

DAT、DOP、MAKEN、IK)は、オランダ語の形として、いずれも標準的なものである(ただしDUSに対応するのは、オランダ語ではDSではなくONSである)。ついでに、オランダ語にとどまらず英語の語形まで考慮に入れてみるのもおもしろいだろう。ドイツ語では方言と位置づけられる語形が、オランダやイギリスでは、標準的な形へと連なっていくのである。

したがって、ドイツ語の《中央》はライン川の上流部にあり、下流部の言語形態はその《周縁》にあたることになる。しかし、オランダ語としては(さらに英語も考慮にいれるべきだが)、その《中央》は当然ながらライン川の河口部にあり、上流部の言語形態はもはやドイツ語という「外国語」の形態であり、《周縁》のさらに外側に位置することになる。こうして、一方の中央は他方から見れば周縁となり、一方の周縁は他方から見れば中央という逆転が起こることになる。

外国語の辞書のなかには、付録としてその言語の方言地図を掲げているものがある。ドイツ語の辞書にもそういうものがあるが、たいていの場合、オランダは(さらにベルギー北部とフランスの北東端も)、北海に面して帯

状に広がる、ドイツ語の低地方言地帯に含まれている。

しかし、同じくドイツに隣接し、陸続きのデンマーク語は、ドイツ語とは別の言語として扱い、地図のドイツ語圏にも取り込まれたりしない。いったいオランダ(やベルギー)の人たちは、こういう地図をどんな思いで眺めるのだろうか。たしかに、オランダ語はゲルマン語のなかでドイツ語と近い関係にある言語ではあるが、隣接のデンマーク語と同様、独自の自立した言語として扱ってもおかしくはないだけに、なおさらこの偏りには興味を引かれる。

かつて、ハンザ同盟華やかなりし頃、ドイツ北部の港市はいずれも大変栄え、言語に関しても、独自の規範を打ち立て出版活動を行うほどだった。すなわち、当時そこはそれなりに《中央》だった。しかし、今日、上述の言語地図が明らかにしたように、ドイツ語の《中央》は、もっとずっと南に移動し、北ドイツの言語は、《中央》からドイツ語の《周縁》に転じてしまった。「中央の周縁化」である。このように、一方が周縁から中央へと転じたとき、それを埋め合わせるかのように、中央から周縁に転じる他方が存在することがある。北ドイツはその

一例と言えよう。

オランダ語が、今日、それ自体の中央性を保持し得ているのは、北ドイツと異なり、吸収合併されてドイツの一部とならなかったからである。すなわち、政治、経済、文化の各方面において、ドイツの影響を受けながらも、北ドイツのように、一つの中央へと連なる多様な周縁の一角を成すことに甘んずることなく、自らの中央性の確立に腐心し、それを維持発展させてきたからである。海外への発展ぶり一つをとっても、ドイツがオランダの足もとにも及ばない時代が長らく続いたのである。

オランダとしては、北ドイツの言語との連続性の強調による、オランダ語のドイツ語への吸収合併の動きは何が何でも阻まなくてはならない。そこで、今日、オランダ政府と隣国のベルギー政府は、オランダ語(ベルギー北部の住民は、愛着を込めてフランデレン語と呼ぶ)に対して、標準語の制定(「共通標準低地語(オランダ語: *Algemeen Beschaafd Nederlands*)」など、共通の国語政策をとるための協議機関を設けている。オランダ語の足場をさらに強化するために、長年、フランス語とオランダ語の言語紛争に苦しんできたベルギーと手を組んだ

わけである。この政策はベルギーにとっても得るところが大きい。ベルギーは、一八三〇年の独立時に制定した憲法ですでに、国語として、フランス語とオランダ語の両方を認知していたが、それはあくまで形式上のことであって、実際には有力な国際語であるフランス語を前にして、オランダ語の劣性は如何ともしがたかった(オランダ語がフランス語と並んで公用語になったのは一九三二年のこと)。それがオランダ政府と協力することで、オランダ語の地位のいっそうの安定化を図ることができるようになったのである。

他方、実現性は乏しいが、北ドイツの低地方言の話し手たちが、自分たちはオランダ語(あるいは低地語)を話していると主張したとしても、べつにおかしくはない。実際、ルクセンブルクには、自分たちはドイツ語の中部方言を話しているのではなく、歴としたルクセンブルク語を話しているのだと主張する人々があり、ルクセンブルクは国としてもこの立場を擁護している(ドイツ語の方言地図では、ルクセンブルク語もオランダ語同様、無視されることが多い)。したがって、北ドイツの低地方の住民が、言語的周縁を脱し、あらためてその中央化

を図る手段として、自分たちの言語をオランダ語(あるいは低地語)と称し、オランダ政府やベルギー政府に働きかけ、「共通標準低地語」に北ドイツの低地語の要素を少しでも反映させるという方法を取ったとしても、実現の可能性は別にして、何ら不自然なところはないのである。⁽³⁾

ドイツの南北の方言差、言い換えれば、南の標準的形態と北の周縁化し方言と化すにいたった形態の関係、およびそれらとオランダ語との関係、これら諸関係は、このように、言語とは何か、また方言とは何かについて、中央と周縁という、言語と地域の関係に対する価値評価と絡めることで、いろいろと興味深い問題を提起してくれる。

さらに、目を他に転ずれば、同じ土俵の上に載せてもいいのではと思える言語状況が、次々と見えてくる。たとえば、フランスの南北の方言差なども、ここで取り上げておかしくないだろう。なぜなら、中世においては、南フランス各地の諸侯に迎えられた吟遊詩人トゥルバドゥールの活躍に見られるように、言語文化の点では、南フランスを中央と見、北を周縁と見ることも可能だった

のだから。それが今日では、北が中央化し、南の言語は北の言語の方言とみなされる。南を代表するオック語のルネッサンスが叫ばれること自体、裏を返せば、かつて栄えたオック語が減退したという事実が受け入れられていることを雄弁に物語っている。

『プロヴァンスの少女』（原題は『ミレイユ』一八五九年刊）をプロヴァンス語（オック語の一方言と見うる）で著し、一九〇四年、ノーヴェル文学賞を獲得したフレデリック・ミストラルは、一時、スペイン領内のカタルーニャの独立運動家と手を組もうとしたことがあった。たしかに比較言語学者は、オック語を、北フランスのオイル語（すなわち今日のフランス語の前身）とよりも、カタルーニャ語と近い関係にあると認めている。したがって、南フランスの言語を母語とする話し手が、北フランスの言語よりも南隣りのカタルーニャの言語に親近感を覚えることがあったとしても、取りたてて不思議なことではない。ミストラルがそのような言語上の身近さに触発されて、くだんの運動家に近づいたのかどうか定かではないが、当時、プロヴァンスの「中央化」がほとんど唯一の目標であった彼としては、プロヴァンス単独で

の独立は困難であり、スペインからの独立を企図していたカタルーニャ人と手を組んでもいいと思えるほど、心の中で北フランスを相対化していたことだけは間違いない。

方言の中央化と言語の周縁化

比較歴史言語学は、「言語」を上位概念、「方言」をその下位概念として位置づける。したがって、インド・ヨーロッパ祖語を「言語」と見れば、ゲルマン語やロマン語、スラブ語などはその「方言」となり、ラテン語を「言語」と見れば、その「方言」としてフランス語やイタリア語、ルーマニア語、スペイン語などを挙げることができる。ここでは、言語も方言もたがいに関係が成り立つ相対的な概念である。

しかし、我々の日常の感覚は、言語と方言を相対的というよりは絶対的なものとして思い描きがちである。方言はどこまでいっても方言であり、言語の位には昇れないかのごとくである。もちろんこれが一種の錯覚であることは、上述のオランダ語とドイツ語の関係から明らかであろう。

国境とか国家のしがらみを取り払い、そういうものがいまだ存在しなかった悠久の昔から続いてきた事実、すなわち、共同体を成し、固有の言語を話して暮らす人々の存在と、そういう人が他の言語を話す他の共同体に属する人と出会い交流する様を土台にして考えるなら、人の用いることばは、それが都会のしゃれたことばであれ、片田舎の訛りのひどいことばであれ、本人にとってはいかがえのない《中央》語であるはずである。仮に親の世代とは異なる言語を子の世代が話すようになったとしても、国家がするような上からの強制なり半強制の結果でなければ、それは子の側がよりよく生きるためにした選択の結果であると思ふべきである。そのかぎりでは、スイッチされた新しい言語も、当人から見れば歴とした《中央》語なのである。⁽⁴⁾

さきほど日本語の東西方言の境界の問題を取り上げたが、それはいわば方言対方言の問題であった。ここでは、言語なのか方言なのか、といった問題を我々の身近なところに探っていきたい。すると、まず目に飛び込んでくるのが沖縄の言語の位置づけの問題である。

今日、おおかたの方言学者は、印欧祖語にあたる日本

祖語を考え、その方言として、すなわち、スラブ語やゲルマン語やケルト語などにあたるものとして、本土(ないしは内地)方言と琉球方言をたてるのが通例である。すなわち、国語としての日本語の統一感を失わないためにも、たとえば、日本祖語にさかのぼるべきものとして、ヤマト語とリュウキュウ語という独立の言語をたてるところをしない。ドイツ語の例になぜかえるなら、その下位概念として、オランダ語とドイツ語という言語をたてるのではなく、低地方言と(中部方言と)高地方言というように、方言をたてること、大ドイツ語圏を確保するほうを選ぶようなものである。言語なのか方言なのかという議論には、暗黙のうちに、国家とか国境の概念がこっそりと入り込んでいる。

敗戦後間もない頃といえば、「異民族」の支配下にあった沖縄が、精神的に日本の一部であることをもつとも実感しなかった時である。結果的に事なきを得たが、「異民族」の軍政府は、当然のように英語教育の重視をうたい、琉球の言語による教科書の編纂をもくろんだ。沖縄と本土との一体感にじんわりとくさびを打ち込もうとしたわけである。これに対し、戦前、方言撲滅

運動とまで評された、苛烈をきわめた国語教育にたずさわ
り、心底苦悩したはずの教師たちは、「異民族」から
のこの攻勢に対し、以前にもまして熱心に標準語教育の
必要を説いたのだった。それはまた、ヤマトの日本政府
文部省の「学習指導要領」(昭和二二年)にうたわれた
「なるべく、方言や、なまり、舌のもつれをなおして、
標準語に近づける」という戦前と変わることはない国語
教育の目標にも合致していた。そういう時期に、日本政
府は、『沖縄語辞典』の出版を後押ししたのである。『沖
縄方言辞典』ではないことに注目しなければならぬ。
学問的な良心として「沖縄語」という表現を選んだのか
もしれないが、時代の気分として、暗黙のうちに、問題
の「異民族」への配慮が働き、沖縄をヤマトの周縁に位
置づけるのではなく、その外側へと突き放すほうを選ん
だのかもしれない。言うなれば、ドイツ政府が、オラン
ダやベルギーに配慮して、「低地方言」ではなく、「低地
語」の、「オランダ語」と言い換えてもおかしくない意
味での「低地語」の辞典をわざわざ作ったようなもので
ある。⁽⁵⁾

この『沖縄語辞典』、しばらく絶版になっていたが、

新聞の報じるところによると(朝日新聞、一九九八年四
月二五日付け朝刊)、最近再版され、沖縄では「研究者
でもない一般の人が買い求め、発売と同時に売り切れ
た」とのことである。この辞典のタイトルが、「沖縄方
言」ではなく「沖縄語」と表現されていること、それも
日本政府のお墨付きを得てそう表現されていること、こ
のことが沖縄の人に与える心理的効果は、当然ながら、
出版当初の三十数年前と今日とは違っている。すなわ
ち、「沖縄語」は、この数年来、沖縄において顕著にな
りつつある、周縁を脱しようとする動きとみごとにかみ
合うのである。つまり、沖縄の言語に関して、この辞典
は図らずも、「周縁の中央化」を象徴することになった
のである。このことは、裏を返せば、かつて琉球王国時
代、自らの《中央》性を経験した琉球には、その後、大
日本帝国に吸収されていく過程で、言語のみならず各方
面において、「中央の周縁化」を強いられてきた歴史が
あるということを浮き彫りにする。そしてその「歴史」
は、依然として今日も継続中だということを、いまや多
くの沖縄の人々が実感しつつある。つまり、沖縄におけ
る「光復」もまた、台湾における「光復」同様、苦いも

のとなったのである。今日の沖縄における多方面にわたる「周縁の中央化」の試みは、したがって、「本土復帰」というこの苦い「光復」を克服する試みでもある。

いま「光復」という表現を用いたが、おそらく違和感を覚えた人も多いだろう。なぜならこの言葉は、かつて日本という「異民族」の支配に苦しめられた人たちが、その日本の敗戦による自らの解放を指して言うことばだからである。それを敢えて用いたのは、「日本」という「異民族」は、「アメリカ」という「異民族」や、さらに「ヤマト」という「異民族」と言い換えることができるのだということを示したからに過ぎない。

東アジアの中央と周縁―あとがきにかえて

前節で取り上げた沖縄(琉球)は、かつてシナからもヤマトからも周縁の地にあることを強みとして、自らをアジアの海上交易網の中央に位置づけ、大いに繁栄した時代を経験した。しかし、薩摩の侵略を受け、明治政府によって日本の一部に組み込まれる、すなわち内地化されるにおよんで、日本の中央からもっとも遠い周縁として位置づけられざるを得なくなった。その結果、国語教

育に見られるように、上からも厳しい政策(方言札のごとき)がとられたが、下からも中央(ヤマト)に早く追いつこうとする気分が醸成されることになり、内地への同化に拍車がかかることにもなった。

また、一九四五年、日本の敗戦に際し、上述の「光復」に沸き返る瞬間を経験した台湾は、その昔、オーストロネシア語族に属する言語を話す人々(いわゆる「高砂族」)が、いくつもの集団に別れて人知れず暮らしていた時代には、自給自足的な無数の「中央」から成っていた。しかし、大陸からシナ人が渡来し、ヨーロッパ人が触手を伸ばし、それをシナ人がはねかえした後、大陸の帝国の辺境領と位置づけられるにおよんで、それまでの小さな「中央」を高地へと追いやりながら、島全体としては「周縁」ないしは「化外の地」と化していった。

そうであればこそ、日清戦争の敗戦のしるしとして、清から日本に割譲されたのである。

日本の植民地となった台湾は、やがて今度は日本の周縁に組み込まれることになる。これは、沖縄にとって、自らの風下に立つ地域が新たに生まれたことを意味する。台湾で教師や警察官をした人には沖縄出身者が多かった

と言われるが、同じように日本の周縁に位置づけられた者同士、台湾の人々に対し理解と同情心に富む沖縄人も多かったが、台湾を沖縄より一段下に見ることで屈折した満足感を得る者もいたはずである。そもそも琉球自体、王国時代から、その版図の内部で、沖縄本島による先島など離島に対する差別や蔑視を経験していた。その構図がそのまま拡大され、末席に台湾が新たに組み入れられたと感じた人も少なくはなかったであろう。

その後台湾は、日本の敗戦によって、初めて「中国」の一部を成すことになるが、共産党国家が最後まで解放できない土地として今日まで残っており、北京から見れば、はやく香港のように一定の周縁化を画りたい地域ということになる。しかし、周知のように、台湾は今日、積極的に自らの中央化を画っており、北京との軋轢もそれだけに激しくなっている。

朝鮮半島の沖合に済州島がある。この島にもはるか昔に独自の国が栄えたことがあった。しかしその後は、半島にどのような国家が生まれようと、その辺境、周縁であり続けた。

たしかに、国家という縛りを前提にして東アジアを眺

めると、沖縄も台湾も済州島もいずれも個々の国家内の《周縁》の地であり、だからこそ、台湾や沖縄に見られるように、周縁の中央化とでも言うべき試みが展開されることにもなる。しかし、国境線の書き込まれていない白地図を眺めると、これらの島々が、まさに東アジアの《中央》に位置するのが分かる。ただ残念ながら、今日この「地の利」をもっとも活かしているのは、アメリカの軍隊である。かつて琉球王国は、まったく別の形で、平和理に、その地の利をいかに発揮し、繁栄の基礎を築いたが、そのような周縁の中央化を、将来再び、この東アジアの中央部で再現したいものである。

ヴェルナー・ケーギは、その著『小国家の理念』（坂井直芳訳、中央公論社、一九七九年）の「まえがき」で、ギリシア以来の都市国家や、スイス、オランダといった「小国家」を念頭に置きつつこう述べている、「けだし一つの世界、甲の形にせよ乙の形にせよおそらく我々の未来を成すであろう一つの世界、この一つの世界も、故里という細胞群（小国家）——精神生活が東でも西でもその都度その都度栄えた細胞群——が健康を維持する限りにおいてのみ生きうるのであるから。これらの細胞群は

生長の巢である。」

沖縄や台湾、済州島をはじめとする、アジアの「小国」にも、ヨーロッパの小国が受けているのと同様の評価と敬意が与えられてしかるべきである。そして、ヨーロッパの小国がヨーロッパならではの知恵の宝庫となっているように、これらアジアの細胞群が発揮する、アジアならではの知恵にも大いに期待したいのである。

(1) コセリウの名著というべきは『共時態・通時態・歴史』であり、田中克彦先生と亀井孝先生による日本語訳がある。亀井孝、田中克彦と言えば、一橋大学に言語学を導入し、それに磨きをかけ、さらに個性豊かに発展させてきた二人だが、彼らが互いの個性をぶつけ合いながらも、珍しく共同作業をしたことがあった。それが、最終的に『うつりゆくこそことばなれ』(クロノス、一九八一年)とタイトルされたこの翻訳である。その「あとがき」を読むと、二人がいかに丁々発止とやり合いながらこの難しい翻訳をすすめていったかがよく分かる。と同時に、二人の本書への高い評価と、その翻訳にかける意気込みの強さを感じ得ることができる。

(2) 一九世紀後半、比較歴史言語学を力強く担っていた「青年文法学派」は、「音法則に例外なし」を標榜していた。それを経験的に確かめるために、音変化に関する調査結果

を地図化したのが「言語地理学」のはじまりだった。すべての語について、その等音線が一つにまとまることが期待されたにもかかわらず、結果は皮肉にも、すでに見たように、語にはそれぞれ固有の歴史があることを証明することになった。ただ、青年文法学派の志向は、このように経験的には成功しなかったが、合理的立場からは、その後も命脈を保つことになる。それは、たとえば、ソシュールの説く「ラング(言語)」やチョムスキーの説く「理想的な話し手―聞き手の言語能力」といった、現代言語学をリードしてきた考え方に引き継がれていると言える。そして、服部もまた「青年文法学派」的な思考法に立脚していたのである。

(3) このように、ヨーロッパのこの地域では、ドイツ語、フランス語、さらに英語、それにオランダ語の間に、微妙な拮抗関係が成立している。その点、欧州連合(EU)の本部がベルギーに置かれたことは象徴的であり、その首都ブリュッセルが、本来オランダ語地域にありながらフランス語が優勢なバイリンガル都市だということは、さらにいっそう象徴的である。

(4) ここでは、先ほど触れた「超民族語」を念頭に置いてもらいたい。また、かつてカリブ海のプランテーションで起こったクレオール化(ビジンの母語化)、すなわち、奴隷の二世や三世が、一世の親が独り言のように話すアフリカの言語ではなく、出自を異にする一世の仲間や大人たちが不十分ながらもたがいのコミュニケーションの手段とし

て活発に用いているビジンを選択し、それを自らの母語（クレオール語）へと発展させていったことも念頭に置いてもらいたい。子供たちは、自分の今と未来を、親の母語ではなく、どこかの馬の骨から分らないようないいかげんな言語であっても、出自を異にする皆が活発にやりとりしていることは（ビジン）に賭けたのである。

しかし、その一方で、「自分はその辺の日本人より日本語ができる」とかつて挑発的な発言をした在日の劇作家や、もはや英語が母語であるにもかかわらず、アイルランド人としてのアイデンティティを強烈に意識していたジェイムズ・ジョイスが、英語をはじめとする諸言語に対してとった態度（『ユリシーズ』や『フィネガンズ・ウェイク』といった作品における言語の扱いを想起せよ）も念頭に置く必要がある。彼らにとって、それぞれ日本語や英語はもはや母語なのだが、彼らのアイデンティティは、ヤマト系の日本人が自分の母語である日本語に対するのとは、自ずと異なる構えをとることになったであろう。ジョイスの場合

も、アングロサクソン系のイギリス人がその母語である英語に対するのとは、やはり異なる思いを英語に対して抱いていたに違いない。

(5) 国立国語研究所が編集し、大蔵省印刷局で印刷された『沖縄語辞典』が出版されたのは、昭和三八年である。しかし、その基礎となる資料づくりは、文部省の科学研究費（共同研究題目「日本民族に近接せる諸民族の言語及び文化等の研究」（傍点は林）を受けて、一人の首里出身者によって、すでに昭和二二年に始められていた。

ちなみに、本辞典の「編集経過の概要」では、「本書の標題で沖縄語と呼んだものは「首里方言」のことだとし（二頁）、「解説篇」は「琉球方言概説」で始まる（十一頁）。すなわち、本辞典は、表紙をめくると、沖縄のことを終始「方言」として扱うのだが、なぜタイトルに「沖縄語」という表現を用いたのか、その説明はどこにもない。

（女子美術大学教授）